

海上の森講座

海上の森から考える 里山・人と自然のかかわり（現地講義）

日時：平成25年7月13日（土） 10:00～15:00

講師：木村 光伸（名古屋学院大学リハビリテーション学部教授）

概況



第1時限 海上の森講義1

海上の森は、生産性の高い森林である。だから、何もしなくても再生する。そのため、いろいろな問題が生じる。また、かつての森林のイメージと現在の森林とを比較すると異なる。だから、50年後、100年後の森林をイメージして考える必要がある。また、一方で「こんな森がいいね」という思いがある。しかし、思いは1人ひとり異なる。

さて、里山学は、人間学ともいえる。人の暮らしを考えた上で里山の問題を考える必要があるからである。だから、人の関わりが薄くなった海上の森は、今日では里山ではなく、むしろ都市近郊林と表現した方が良く思う。日本人は海上の森のような森林をそれぞれの暮らしにあった森林へ改造してきた。クマやカモシカが絶滅しそうになったことがある。その原因の一つに狩猟圧力が挙げられている。自然を資源と見なすと、その資源量はそんなに大きなものではない。しかし、狩猟圧力が消えた今日では、クマやカモシカは身近な環境に現れるようになった。このように環境が変化すると、大きく変わる。

また、里山を考えると、現在では経済的な林業の考え方だけでは不十分である。森林の構造や多様性を知ることの重要性が増している。森林全体を統合的に見る必要がある。例えば、シデコブシを守るために周辺の木を切るという意見がある。また、遷移にまかせるべきだという意見もある。ここで大事なことは海上の森が砂礫層の上に成り立っているという構造を壊さないことである。また、この湿地は、砂がたまり乾燥が進みやすい。現在ある湿地を守るという考え方と、崩壊など新しい湿地が生まれ

ることによって全体として湿地が保全されるという考え方がある。どちらにしても、全体として海上の森の環境が守られることが重要だと考えている。

第2時限 現地観察

現地観察は、吉田川沿いの市道から屋戸川上流のシデコブシの沢筋湿地、寺山川沿いの尾根筋をとおり、古窯跡、ヒノキ林を経てセンターへ戻るコースで行われた。このコースは、海上の森を構成する全ての要素があるとされた。

第3時限 海上の森講義2

現地観察を踏まえて、講義がなされた。

海上の森の地質は砂礫層と花崗岩の深層風化に分けられる。この海上の森がどのような経緯で形成されたかは厳密には分かっていない。様々な自然現象を考えながら海上の森のあり方を考えていく必要がある。